青年女子が抱く母親への認識が及ぼす将来像への影響性について

A53105　平野　真衣

【目的】

本研究の目的は、過去から現在にかけての母親への認識が将来像へどのような影響を及ぼしているのかを調べ、インタビューを用いて検討することである。

【方法】

久保田(2005)が作成した「子どもの頃と現在における母親との関係に関する認識」を調べる尺度を用いて質問項目を作成し、淑徳大学生の女子を対象とし 200 名に質問紙調査を行った。

質問紙調査ではインタビュー協力者も同時に募集し、インタビューによる調査も行った。質問紙調査の有効回答数は 169 部(有効回答率 84.5%)であった。分析にはＳＡＳを使用した。

【結果・考察】

分析の結果、過去から現在にかけて母親との安定した関係を築けている人は、将来像に対し安定したポジティブなイメージを持っていることがわかった。逆に、過去から現在にかけて母親との不安定な関係を築いている人は、将来像に対しネガティブな発言は見られたもののすべての将来像にネガティブな思考があるわけではないことがわかった。

母親との安定した関係を築いている人は、現在において友人や恋人と安定した関係を築けている。そして本研究の中心となる将来像においても安定したイメージを持っていた。これはアタッチメント対象との内的作業モデルがプラスの影響を与えていると言え、安定した関係は将来母親になった時に同じように子どもと安定した関係を築けるという考えの方向性を定めているからだと言える。

母親との関係が不安定な人は、現在において友人などの身近な他者との関係にマイナスの影響を与えていることがわかった。また将来像の影響性を検証したところ、結婚することや母親になることのイメージに、母親との不安定な関係が影響を与えていることがわかった。しかし影響と一言で言っても将来像全てにおいてネガティブな発言が見られたわけではなく、「母親のようにはなりたくない」という気持ちを持つことで、子どもと良好な関係を築いていけるのではというポジティブなイメージも伺えた。また友人に心を開けないなどの発言はあったが、時に励ましてもらうことで将来を肯定的に捉えることができるようになってきたこがわかった。以上のことから、幼少期から現在にかけて一番重要であるとされている母親の存在が個人にとってマイナスの影響をもたらす場合でも、現在のアタッチメント対象が母親以外の身近な他者に変容することや、母親を反面教師にすることで過去に囚われずに生きていこうと希望を持つことで、将来像に対しポジティブなイメージを持つことが可能になるのだろう。

母親との関係は現在や将来像に対し強い影響を与えていることがわかったが、母親との葛藤が強かった場合においては、マイナスの影響をそのまま受けるのではなく、現在誰とどのような関係を築いているかが将来像に影響を及ぼす要因であるということが検証された。